

〈ポストヒューマン〉のY字路

——安部公房『第四間氷期』をめぐる交響——

藤 井 貴 志

1 交響する三人の文学者

埴谷雄高、花田清輝、安部公房——。この三人の文学者が相互に綾なす形で紡ぎ上げた文学空間を名指すとしたら何になるだろうか。埴谷と花田は同い年——一九〇九年生まれ——であり、十五歳下の安部の文学的出発に果たした両者の寄与は疑うべくもない。昭和二十二年九月、安部が成城高校時代の恩師である阿部六郎に「終りし道の標に」の原型となる「粘土塀」を託し、さらに阿部が埴谷にその原稿を委ねることによって安部の作家デビューに結実した経緯はよく知られているように、花田と岡本太郎を中心に昭和二十三年一月に発足した〈夜の会〉に埴谷と共に参加した安部がシュルレアリスムを初めとする〈ア

ヴァンギヤルド芸術〉の洗礼を花田から浴び、また安部がものした数多の変身小説が花田の「変形譚」——それは埴谷の『死霊』連載第一回と共に『近代文学』創刊号（昭和21・1）に掲載された——からの触発抜きには成立し得なかつたことも周知の事実には違いない。この一筋縄ではないか三人の文学者が昭和二十年代から四十年代にかけて共演することになる奇妙な文学空間を、さしあたり〈ポストヒューマン〉と名指すところから始めよう。むしろん彼等の誰も〈ポストヒューマン〉という言葉など使いはしなかつた。端的にかかる概念が未だ存在しなかつたからに過ぎないのだが、にもかかわらず、あまりに広大で多岐に渉る彼等の文学的営為は〈ポストヒューマン〉の総称の元に束ねるに相応しい。たとえばその概念を照らし出す

好例として花田の戦中の批評「群論」²から参照してみよう。

いかにも現実といふものは、求めなくとも、しばしば魂と肉体とを切りさくものだ。さうして、その結果は、一見、求めて断ちきつたばあひと、たいして変りがないやうにみえる。しかし、前者が、裁断の状態に堪えきれず、絶えず再び魂と肉体との結びつきに、——いはば人間性の回復のためにくるしむのに反し、後者の望むところは、人間性の脱却以外のなにもでもない。

「人間性の回復」と「人間性の脱却」というY字路に突き当たり、花田は迷うことなく後者の路を選び取つてみせる。「現実」によつて「裁断」され、非有機的なものとしてバラバラに砕け散つた「魂と肉体」を縫合して再び「人間性の回復」を謀る見知つた路に見切りを付け、むしろその「裁断」を奇貨として「人間性の脱却」を果たし、何か別のものへと生成変化する可能性を秘めた未だ見ぬ路に賭けてみる——〈ポストヒューマン〉への試金石となるかかろY字路を我々はこれから幾度も目撃することになるだろう。

「問題は、苦勞によつて人間ができあがるのではなく、

関係そのもの、物そのものになることによつて、人間でなく、なることにあるのだ」と喝破し、「すでに魂は関係それ自身になり、肉体は物それ自身になり、心臓は犬にくれてやつた私ではないか。(否、もはや「私」といふ「人間」はゐないのである。)」と結ばれていく「群論」の背後には、有機的存在としての〈人間〉が「物」のように仮借なく解体されつつあつた戦時下の「現実」が暗黙に前提されていたに違いない。喪失された「人間性」を再び「回復」する疎外論的な方途を摸索することが当然の局面で、あえて「物そのものになる」物象化を加速させ、もはや「人間でなくなる」ことさえ厭わぬ〈ポストヒューマン〉への路を開示してみせたその顛倒性の裡に花田の批評性が宿る訳だが、花田・埴谷・安部の文学を横断するにあたって抜きには出来ないのがこの〈戦争〉という歴史的ファクターだろう。昭和十年代を潜り抜ける中でそれぞれの形で〈人間〉の限界に突き当たり、もしかしたら〈人間〉は他のようにもあり得たのではないかというオルタナティブな問いを包懐した彼等は、文学を通じて思考実験を繰り返す中で〈ポストヒューマン〉と呼ばれるに相応しい何かを白紙の上に描き出す試みを開始さ

せるのだ。

〈ポストヒューマン〉をめぐる彼等のその試みを先取りして記しておこう。袋小路に陥った近代を超越するべく〈人間中心主義〉を顛倒した〈鉱物中心主義〉によるラディカルな革命を画策してみせた花田清輝、「自同律の不快」や「虚体」といった特異な概念を創出して〈人間〉の超克のみならず「存在の革命」まで志向する長編『死霊』を戦後から約半世紀に涉って書き継いだ埴谷雄高、「壁——S・カルマ氏の犯罪」(『近代文学』昭和26・2)を初めとする数々の変身譚によって〈人間〉の既成概念を揺さぶると同時に、テクノロジーによる〈人間〉の変容まで射程に収めるSF的想像力を併せ持った安部公房。〈人間〉は他のようにもあり得たし、またこれからもそうなのだとしたら、〈人間〉の〈後〉^{ポスト}には何が来るのか?——その決定的問いの元に交響する彼等の壮大な文学的実験を縦横に交錯・連結させ、〈人新世〉の宿痾ともいえる〈人間中心主義〉を根底から脱中心化し、〈人間〉を超越するべく構想された〈ポストヒューマン〉の潜勢力^{ポテンシャル}を限界まで引き出すこと。本論はその基礎的作業に他ならない。

〈ポストヒューマン〉のY字路——安部公房『第四間氷期』をめぐる交響——

三九

2 安部公房『第四間氷期』

ところで花田の「群論」に見受けられた「魂と肉体」という言い回しを、安部を追悼する一文の中で埴谷が使用しているので瞥見してみよう。三人の中で最年長であった埴谷——誕生日は花田の方が早い——が最も長寿(一九九七年、八十七歳没)を保ち、七十に満たずに没した花田(一九七四年、六十五歳没)・安部(一九九三年、六十八歳没)のそれぞれに追悼文を遺すことになったことも皮肉という他ないのだが、ともあれ「突出したアヴァンギャルド作家」と題された追悼文の中で埴谷は「人間をも解体したところから出発」した安部の文学によって「まったく新しい人間存在の探究」が開始され、「私小説が中心となってきたわが国の文学伝統から見ると、大飛躍」を果たすことになったと称讃した上で次のように語っている。

そしてこの大飛躍がこれまでの文学伝統からあまりに離れすぎているので、安部公房や濫澤龍彦を前衛とか異端とか名づけたが、その前衛とか異端の方が本当は日本文学の中央にいなければならない。／大雑把に

いうと、僕のは、哲學的、思考、実験で、安部君のは、科學的、思考、実験です。僕の時代は魂と肉体をまだ二元的にみているが、安部君の時代は魂も肉体も解剖すれば同じだという時代で、僕より進んでいる。これまた、大雑把にいえば、哲學が科學に解消する時代に新しい文學方法を安部君は創出した。

安部追悼の一文の中に濫澤の名が不意に顔を覗かせることも興味深いのだが、従来の文學史の中心と周縁を根底から顛倒してみせるこの言説の裡に、彼等と相互に觸発し合う中で成し遂げた文學的達成への埴谷の矜持を垣間見ることが出来るだろう。ただし「魂と肉体」の捉え方を世代によって峻別してみせる埴谷の視座には注意が必要であり、この分類でいえば花田は同世代の埴谷ではなく明らかに安部と認識を同じくする存在であったに違いない。「すでに魂は關係それ自身になり、肉体は物それ自身」になったという前掲「群論」の一節にそれは明らかかな筈だが、より重要なのは埴谷が自らの方法を「哲學的思考実験」と位置付け、安部を「科學的思考実験」に割り振ることによって「まったく新しい人間存在の探究」へのアプローチを峻別したその見取図にある。「哲

學的思考実験」はむろん『死靈』を指すに違いないが、安部の「科學的思考実験」は具体的にどの作品が該当するだろうか。埴谷が「安部君の最高傑作」と呼ぶ『砂の女』と『壁』も含まれるであろうけれども、この追悼文でも名前の挙がる「新しいSFといったかたちをとった『第四間水期』」をその典型として取り上げてみたい。

日本SF黎明期の金字塔として名高い『第四間水期』（『世界』昭和33・7・34・3）は、(ポストヒューマン)の文學としての諸特性を遺憾なく備えた傑作に違いない。ソビエトのそれに対抗する形で勝見博士によってプロダリングされた「予言機械」は、「海底火山」の「活発化」が「天候異変」に影響を与え、「いずれは、第四水期の名残である氷河や南極の水もとけ」て「海面」が急激に上昇し、殆どの大陸が水没することで第四間水期が終末することを予言する。それを受けて組織された「海底植民地開發協會」は「年に二百万以上」にも及ぶ中絶胎児に着目、「妊娠してから三週間以内」の胎児を利用して秘密裏に「生物の計画的改造」を行い、水中でも息息できる鰓を備えた「水棲人間」の造出に着手する。「胎外發生で、

計画的に、個体発生を系統発生の子からはずしてしま
い「進化を人為的に、かつ飛躍的に」惹起することで誕
生した「水棲人間」——そこには生まれるかもしれないなかつ
た勝見自身の子供も含まれていた——を目撃した勝見は、
〈人間〉が辿ることになるその未来に戦慄し抵抗を示すも
のの、その反応を含め「私の一切を見とおして」いた「予
言機械」——それは勝見（私）の「第二次予言値」とし
てのもう一人の勝見（私）でもある——によつて「暗殺」
が仄めかされるところでこの物語は幕を閉じる。地球規
模での環境の変化とバイオテクノロジーによる〈ポスト
ヒューマン〉の誕生——発表から半世紀以上を経て未
だなおアクチュアルなヴィジョンがここに開示されてい
るだろう。

『第四間水期』については、「これまでのサイエンス・
フィクションは状況の変化を設定するのみで、人間自体
の変化についてあまり考察していないが、社会進化の過
程と生物進化の過程が組合わされるのは安部公房の特
徴」とした上で「まったく新しい質の小説の面白さ」を
そこに見出す書評を埴谷が執筆していることも注目され
るのだが、作品の発表に半年ほど先立つて埴谷・安部に

加えて武田泰淳・荒正人の参加のもと開催された座談会
「科学から空想へ——人工衛星・人間・芸術」（『世界』
昭和33・1）をここで参照してみよう。ソ連による世界
初の人工衛星（スプートニク1号）打ち上げの衝撃を受
けて「技術と人間と体制」と銘打たれた特集の一つとし
て掲載された座談会だが、「人間はどう変るのか」と題
されたセクションの中に「技術が自然よりも人間の方に
向つて進む場合、たとえば、この次にほくはそういうこ
とを書こうと思つていますが」として安部が『第四
間水期』の構想を披瀝する以下の一幕がある。

地球はだんだん暖くなつて、北極の氷がとけて、大
きな山の頂上だけが残るといふことにならないとも
限らない。人工衛星に乗つてどこかに行くこともで
きるけれども、人間を加工して水の中に入れて水中
生活をするということも考えられる。そうすると人
間の感情も変る。同じ人間といえるかどうかかわか
らないが。

〈人間〉の活動が地球上の生態系や気候変動に深甚な
影響を及ぼすに到つた地質年代を〈人新世〉^{アンтропоセネ}と呼ぶが、
安部の問題意識は明確にこの〈人新世〉における〈人間〉

の変容に照準されていることが了解されるだろう。安部に拠れば〈人間〉の「変化には二通りあり、それは進化論のように「いかに自分を外に対応させるか」という受動的変化」と「逆に外部を変える、能動的変化」に二極化される。「人工衛星」は後者の「外部を人間が変化させる能動的変化の無限の可能性を予言」したものであり、その意味では「人工生命」でさえも「生命は物質である」という分子生物学的な認識の上に立った「技術的な自然変革の一部」に過ぎず、「人間の意味を反省させられるような、哲学的な事件」では些かもないのだ、と。「安部君の時代は魂も肉体も解剖すれば同じ」であり「哲学が科学に解消する時代」の文学だとする埴谷が追悼文に記した一節が想起されるが、注目すべきは科学やテクノロジーに媒介された〈ポストヒューマン〉生成を所与のものとして肯定も否定もせず「リアリステック」に議論を推し進める安部のスタンスに微塵も驕りが無いことだろう。

この座談会は、人工衛星打ち上げを「文明史の上で画期的な事件」と位置付け「人類の文明は飛躍的に発展する」と無邪気に言祝ぐ荒のロマン的発言にリードされる

形で展開^⑥していくのだが、「非常に偉大な世紀が始まった」という感想を共有しつつも、政治的背景や軍事的転用を憂慮することで「水をかけ」る埴谷の発言が続き、さらに「ぼくも、ちよつと違うところもあるが、やはり水をかけたいな」という安部の発言に引き継がれていく。荒と安部の立場の相違は著しく、鮮明な形で擦れ違いを繰り返すのだが、安部と埴谷のそれには不透明なところがある。座談会を通して安部は「猿が人間に変わった」時に生じた受動から能動への「質的飛躍」を特権視し、それ以来、人工衛星の現在に到るまで「外部を変える、能動的変化」の一点に於いて〈人間〉はむしろ変わっていないのではないかと問い掛けるのだが、荒や武田、そして埴谷の賛同が得られず安部が一時孤立無援に陥る一幕は興味深い。とはいえ助け船を出したのもまた埴谷であり、「みんなにすつかり反対されちゃって、弱ったな」という安部の呟きに続く埴谷の次の発言は、〈ポストヒューマン〉の文脈を埴谷なりに——つまり「哲学的」に——汲み取った上での安部への援護射撃であったに違いない。埴谷は言う。

変革の原理を握った人間は、生命までも変化させ

うる段階に達したということですね。ドストエフスキイは『悪霊』のなかで人神を論じて、地球と人類の物理的変化を述べている。ドストエフスキイ自身も半ばしか信じていなかったその人神の段階がすでもうやってきてきているんですね。

その「地球と人類の物理的変化」に対し「哲学的思考実験」を行ったのが埴谷であり、「科学的思考実験」を試みたのが安部ということなのだろう。「安部さんはヒューマンイズムというものは変らないと思う？」と武田が問うと、「そんなものは変るでしょうね」と間髪入れず安部が応答する場面など見所の多い座談会⁸なのだが、テクノロジーが開示する未来へのかかる明快なスタンスを起点として執筆されたのが『第四間水期』であるにしても、その思想がそのままの形で物語に移し替えられた訳ではむろんあるまい。むしろ『第四間水期』のプロットは、自ら開発した「予言機械」が示す（ポストヒューマン）の未来に勝見自身が当惑し、そのベクトルを反動的に（人間）の側に揺り戻す力学に駆動されて展開するのであって、読者もまた「水棲人間」の表象を最終的に如何に受け取れば良いのか、あのY字路の如き二筋のベ

クトルの手前で宙吊りにされるところにこのテクストのポレミカルな強度が胚胎するだろう。

たとえば次のような場面がある。「まるで立体的な水族館」のような「大小の水槽」で「哺乳動物の母胎外発生の研究」を続ける山本博士が、「ほとんどの自然物を、野生から人工的なものへと改良」し「進化を、偶発的なものから、意識的なものに変える力を獲得」した「人類」にとつて「次は、人間自身が、野生から開放され、合理的に自己を改造すべき」段階ではないかと問うと、「水棲人」は所詮「奴隸」であり「要するに植民地人」に過ぎないと勝見が切り返す流れの中で、勝見の部下であり実は「海底植民地開発協会」の「室長」でもあった頼木との間に次のような会話が展開していくのだ。

「しかし、何時の時代にでも、新しいものはつねに奴隸の中から生れてきたのではありませんか？」

「だが、水棲人をそんなふうには認めることは、自分を否定することじゃないか。地上の人間は、生きながら過去の遺物になつてしまふ。」

「耐えなけりやなりませんよ。その断絶に耐えることが、未来の立場に立つことです……。」

「しかし、私が水棲人に対する裏切り者なら、君たちは地上の人間に対する、裏切り者じゃないか」

果たして〈ポストヒューマン〉としての「水棲人間」の「未来」はユートピアなのかディストピアなのか——進むべきそのベクトルは座談会における程には明瞭なものではなく、解釈の中で反転したり、引き裂かれたまま宙吊りにされる余地を確かに残しているだろう。

クリストファー・ボルトンに拠れば『第四間水期』は科学・技術自身の否定ではなく、それらに対する未熟な考え方への批判」であり、「科学による激しい変貌を賛歌しながらそのショックを恐れるアンビバレンスが明確に映る」のはその為だとしている。勝見が「地上の人間」を保守しようと揺り戻しを行う一方で、「陰謀をたくらんでいる集団にとって、水棲人は人間性の喪失そのものより、人間の限界を超える、人類の将来を保証する希望」を秘めた存在でもあり、ボルトンは「この二つの反応の微妙な釣合」の裡に『第四間水期』が孕むポストモダンのな批評性を認めるのだ。彼が「アンビバレンス」や「二つの反応の微妙な釣合」と表現したこのテクストにおける二つの相反するベクトルは、〈ポストヒューマ

ン〉の概念に直面した我々が逃れることの出来ないあのY字路に他ならない。たとえば「人間中心主義的な主体の後には何が来るのか」と問うロージ・ブライドッティは『ポストヒューマン』の中で次のように記している。

わたしたちは実際にポストヒューマンになっている、あるいはわたしたちはポストヒューマンではない。わずかにでも確信をもって、誰もがそう断言できるわけではない。「人間」なるものにどうしてもかなりの愛着を覚えてしまうと主張する者もいるのである。(……) それでも目下のところ、ポストヒューマンなる観念は、人新世アンтропоセとして知られるこの時代において、広範囲に流通しているのである。それは不安感とともに、それと同程度の高揚感をも誘い出し、物議をかますような文化的諸表象に刺激を与えている。

〈ポストヒューマン〉としての「水棲人間」に直面した勝見が「高揚感」と「不安感」に引き裂かれつつ、「人間」なるものへのノスタルジックな「愛着」を捨て去ることができなかった先の対話を想起しよう。「ポストヒューマンは、かつて万物の尺度であった「人間

〔Man〕が深刻に脱中心化されている可能性に対して、歓喜のみならず不安をも引き起こしている」といった形でプライドッティは〈ポストヒューマン〉的転回が齎す両義的反応を同書の中で繰り返し描き出しているけれども、彼女の言う「ポストヒューマン的状况の魅惑と、その非人間的でときに非人道的でさえある諸側面に対する懸念が交互に押し寄せているという事態」の見事な表象こそ『第四間水期』の中枢に位置するものではなかったか。たとえば勝見の「第二次予言値だと称する声」が勝見に語りかける次の科白のように——「注目していたんだよ。君が思いきつて未来に踏みこむか、それともやはり尻込みしてしまうか……」。

このように考える時、安部が単行本の「あとがき」の中で「未来が、肯定的なものであるか、否定的なものであるか、という議論」に対して「そのいずれをもとらなかつた」と記していたことは象徴的である。肯定／否定の「価値判断をこえた、断絶の向うに、「もの」のように現われ」、「日常的連続感に、有罪の宣告」を下すとされる「真の未来」とは、「現在」に拘束された〈人間〉の尺度をもつてしては表象不可能な物自体ともいふべき

他者としての〈ポストヒューマン〉の謂いでもあろう。その「未来」の善悪を我々が「裁く」ことなど端的に不可能なのであり、そればかりか不意に「現在の中に闖入してきた」その物自体としての「未来」¹¹（〈ポストヒューマン〉）によって逆に我々の「日常性」というこのもつとも平凡な秩序」が裁かれることになる¹²と安部は言うのだ。安部の残した数多の変身小説が、変身したその異形の相貌を通じて「日常」としての「現在」を覆う自明性のヴェールを剥ぎ取る構造を有していたように、〈ポストヒューマン〉の形象もまた「現在」が連続的に孕む〈人間中心主義〉を異化し、その自明性に決定的亀裂を走らせる批判的装置として機能するに違いない。

たとえば『第四間水期』の中に「その買いとられた胎児たちは、死んではいけない。病院の中で、特別の仕掛けで育てられ、腹の中で育つた以上に理想的な人間になるのだ」という「水棲人間」の来歴を説明する件りがあるけれども、〈ポストヒューマン〉生成のイメージの裡に中絶されゆく胎児の形象が用いられることは重要だろう。¹³リー・エーデルマンは論文「未来は子ども騙し」¹⁴の中で、「子ども」を再生産しなければ「未来を考えることが

できない」といった脅迫と共に「社会的秩序の目的を具
 体化し、その秩序を永続的に維持」してきた政治と、そ
 れに動員される形で「歴史的に構築」されてきた「〈子
 ども〉」という「比喩」を併せて批判しつつ、かかる「再
 生産的未來主義」に対する抵抗を「クイア理論」の立場
 から試みている。「私たちは中絶の支持者である。未來の
 比喩としての〈子ども〉は死ななければならぬ」とエー
 デルマンが過激な形で述べるのは、「再生産的未來主義」
 が「未來の形態で過去を再生産し、未來そのものを單な
 る再生産の一形態として構築」してしまうからに他なら
 ない。過去・現在・未來という不可逆の連鎖の中に親・
 子の連鎖がビルトインされた果てに待っているのは悪し
 き現状追認以外ではないからだ。

直線的な時間性の中に否応なく繰り込まれる〈生殖〉
 のイデオロギー性を曝き、「再生産的未來主義」の切斷
 を試みるこうした視座は、〈反出生主義〉の思想と相俟つ
 て埴谷の『死霊』の中にも確認できるものだが、『第四
 間水期』におけるあの中絶されゆく胎児を転用して造出
 された「水棲人間」のヴィジョンもまた、まさしくかか
 る形で過去から未來へと引き続く「再生産」を切斷する

べく埋め込まれた「クイア」な形象であつたに違いない。
 だが「予言機械の制作者にも似合わぬ、しんからの保守
 主義者」たる勝見にとつて所詮「未來はあくまでも現在
 の時間的投影」——即ちエーデルマンの言う「再生産的
 未來」——に過ぎなかつた。その勝見に、頼木が宣告を
 下す。

「つまり先生は、やはりその未來には、耐えられなかつ
 たということですよ。結局先生は、未來というものを、
 日常の連続としてしか想像できなかつた。その限り
 では、予言機に大きな期待をよせていらつしやつた
 としても、断絶した未來……この現実を否定し、破
 壊してしまうかもしれないような、飛躍した未來に
 は、やはりついて行くことが出来なかつた。」

「未來」は「現在」の延長線上に予測可能な形である
 のではないし、「進化」もまた単線的かつ目的論的な形
 であるのではない。「ふと未來が、今までのように單な
 る青写真ではなく、現在から独立した意志をもつ、狂暴
 な生きもののように思われた」と勝見が一度は抱き得た
 その予感の裡にこそ、あの〈ポストヒューマン〉の帰趨
 が賭けられていたのではなかつたか。〈それ〉は我々が

立脚点とする「現在」に馴致されることのない「狂暴な生きもの」なのかもしれないし、かかる表象さえ内破するような言語を絶した何かなのかもしれない。「水棲人間」を目撃した勝見を襲う「感覚的には拒みながらも、心のどこかでは、つい面白がつてさえた」というアンビバレントな反応のただ中で宙吊りになりつつ「断絶した未来」としての〈ポストヒューマン〉の予感に耐え続けること——。『第四間水期』のみならず安部はそのようなシンギュラーでクイアな出来事としての〈ポストヒューマン〉を描き続けたのであり、たとえば後の『箱男』（昭和48、新潮社）における次のような魅惑的な一節が示すのもまたそのこと以外ではなかった筈だ——「もつとも、箱男という人間の蛹から、／どんな生き物が這い出してくるのやら、／ほくにだつてさつぱり分らない」と。

3 〈ポストヒューマン〉のY字路

埴谷と同様、実は花田もまた『第四間水期』の同時代評を残していることは注目されてよいだろう。花田は

「S・Fと思想」（『宝石』昭和34・9）の中で次のように語り出す。

科学者であるフランケンシュタインは、かれのつくりだした怪物によつて殺される。しかし、その怪物が、はたしてこれまで考えられてきたように怪物みたいに見えるかどうかということは、はなはだ疑問であつて、案外それはフランケンシュタイン博士にそつくりかもしれないのだ。それかあらぬか、いまでは、フランケンシュタインというと、すくなくともわれわれの周囲では、怪物そのもののほうをさすばあいが多いようだ。

花田はかかる形で「怪物」と（人間）の明確な二項対立を突き崩しつつ、安部の『人間そつくり』¹⁵を例示しながら「安部公房自身のみならず、フランケンシュタインであるのか、怪物であるのか、そくぎに決しかねている」事態を素描していく。だがその宙吊りの状態は徐に「怪物には未来が——すくなくともフランケンシュタインよりも、未来がある。もしかすると、かれが怪物だとみられているのは、そのせいかもしれないのである」と強引に転回され、右の引用が先駆的な〈ポストヒューマン〉

の文学に他ならないメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』（二八一八）と『第四間水期』を間テクスト的に接続していく花田の周到な導入であったことが明らかとなる。たとえば「意図の如何にかかわらず、つくった者が、つくりだされた者に裁かれるというのが、現実の法則なのであろう……」という『第四間水期』終幕直前の一節を踏まえる時、勝負（フランケンシュタイン博士）Ⅱ「つくった者」（人間）が、水棲人間（怪物）Ⅱ「つくりだされた者」（ポストヒューマン）に裁かれるその顛倒した構図の鮮やかな重なりの中に、このSF的ゴシックロマンを『第四間水期』のプレテクストに位置付けてみせた花田の慧眼が浮かび上がるだろう。

さらに花田は続ける——「安部公房の力作『第四間水期』は「革命的な立場から、二十世紀の『フランケンシュタイン』を描きだし、あくまでも怪物の、がわに立つて、ともすれば日常的な現実にしがみつしがちなわれわれ人間を、無慈悲に断罪しているので痛快だ」と。「ウォーター・ベビー」たちを、外がわからではなく、内がわから、描いて欲しかつた」という注文は添えられるもの花田の評価は極めて高いものであり、とりわけ「あくま

でも怪物のがわに立つて」という一節には、あのY字路に直面して躊躇なく「人間性の脱却」の側を選び取ってみせた花田の面影を彷彿とさせるだろう。引き裂かれた宙吊り状態そのものに批評性を見出すことも可能なこのテクストに対し、「未来は、そのような危機の認識の上に立つたフランケンシュタインの手によつてつくりだされた怪物である、水棲人間のものだ、というのが、安部公房の論理」と言い切ってみせる花田の振り切れた——むろん（ポストヒューマン）の側に——ラディカルさは特筆に値する。この批評を目にした安部が直ぐさま花田に書簡を送り、「ばくの一番のねらいを読みとって下さったのが、花田さんだけだったというのは、むしろ誇るべきこと」であり「本当にうれしく思いました」と感謝の言葉を連ねていることも印象的であり、（ポストヒューマン）をめぐる両者の鞏固な紐帯を確認することが出来るに違いない。

本論は（ポストヒューマン）の概念を通して埴谷・花田・安部の文学を横断する試みに他ならないが、安部に関しては前章で触れたクリストファー・ポルトンが先の『第四間水期』論の中でN・キャサリン・ヘイルズを参

照しつつ、「現在ではバイオテクノロジー、遺伝工学、サイバネティクス等の身体を操作する技術は、自然と人工や人間と機械の境を曖昧にし、人間性を定義する基礎とコンテクストを侵食してしまった」といった形で明確に（ポストヒューマン）の概念に触れていることが注目される。⁽¹⁸⁾ ボルトンは別の安部論の中でもヘイルズの主著『我々はいかにしてポストヒューマンになったか』を引用した上で、「ポストヒューマンである私たちの奇妙で共生的な機械との関係性」を通して「私たちが考える人間性という枠組みが、いかに閉鎖的で生彩を欠い」ているかを「暴露」した所に「全作品を通してサイエンス・フィクションの作家であり続けた」と見做すことも可能な安部の文学的特質を看取している。

本論もこうしたボルトンの先駆的研究の延長線上に位置付けることが出来るのだが、惜しむべきはボルトンが「安部に強く影響」した花田の批評について触れながら、渡辺広士の『安部公房』⁽²¹⁾の中で触れられた花田の「ドン・ファン論」（『人間』昭和24・9）等を表層的になぞるのみで、（ポストヒューマン）の理論と花田が如何に具体的に切り結ぶのか、精緻な分析が為されているとは言い

難い点であろう。⁽²²⁾ それは「花田の無生物主義」といった言い回し——正しくは「鉱物中心主義」と言うべきだろう——にも現れており、安部と花田に限っても同時代の歴史的文脈を前景化した上で（ポストヒューマン）の主題系とそれに纏わる言説の配置をより微細に追跡する必要があるに違いない。⁽²³⁾ さしあたりここでは渡辺も引用する「ドン・ファン論」から以下の一節を参照したい。

ルネッサンス以来、ヨーロッパでは、生命のあるものを極度に尊重する傾向があり、鉱物よりも植物が、植物よりも動物が、——殊に動物のなかでは人間が、一段とすぐれたもののようにみなされてきたようだが、むしろ、これは人間的な、あまりにも人間的な物の見方であり、近代の超克は、われわれが、こういう人間中心主義を清算し、無生物にはげしい関心をもち、むしろ、鉱物中心主義に転向しないかぎり、とうてい、実現の見込みはなからう。

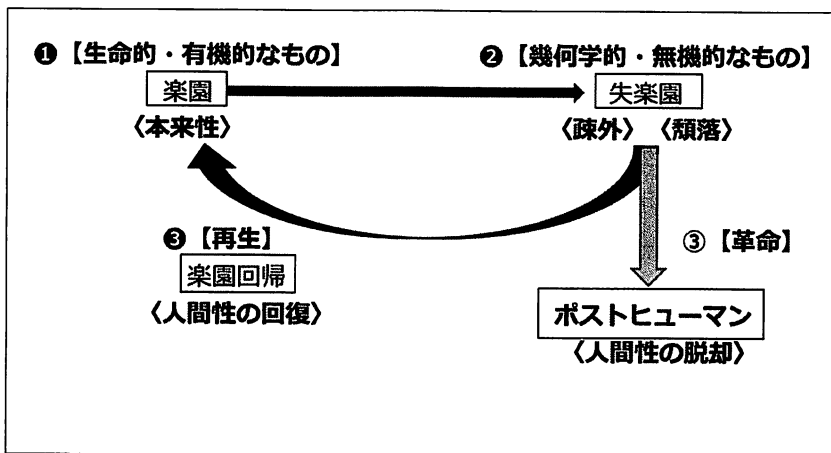
「人間中心主義」を「近代」の宿痾と位置付け、人間／動物／植物／鉱物という形で「ルネッサンス以来」階層化されてきたヒエラルキーを「鉱物」を頂点とする（鉱物中心主義）へと逆様に顛倒することで「近代の超克」を

画策する花田の革命的ヴィジョンがここに鮮明に定着されている。引用部の後には「ヒューム」が「二十世紀藝術の特徴を、生命的・有機的なものから、幾何学的・無機的なものへの移行に求めた」ことが例示され、花田の目論む〈鉱物中心主義〉が補強されていく。

ここで花田のロジックを整理しておこう。我々はこれまで〈人間〉を無比の頂点として「生命的・有機的なもの」を「極度に尊重」し「幾何学的・無機的なもの」を生命を欠いた死物として劣位に貶めてきたが、「人間的な、あまりにも人間的な」かかる地平から離脱し、〈人間中心主義〉を「超克」して〈ポストヒューマン〉の地平を開示するチャンスは、これまで過度に抑圧されてきた「幾何学的・無機的なもの」の潜勢力に賭けられると花田は言う。これを弁証法的な運動として捉えるとすれば「生命的・有機的なもの」が全円的に調和・充足した本来的な状態【**①楽園**】がまず存在し、次にそれが「幾何学的・無機的なもの」へとバラバラに「解体」され【**②失楽園**】、非本来的な死物として疎外され廢墟へと類落したその状態が「再組織」されることによって再び有機体として「再生」する【**③楽園回帰**】というサイ

クルが予定調和的に想定されるのではないだろうか。花田がユニークなのはかかる疎外論的なロジックを逆手に取り、むしろ**②**における「幾何学的・無機的なもの」を本来性からの類落として位置付けることなく、むしろそれへの尽きせぬ偏愛を貫いてみせる点だろう。「物そのものになることによつて、人間でなくなること」(「群論」)は決して否定性あるいは欠如態としてある訳ではないのだ。それは**②**の位相から「人間性の回復」を図る路**③**ではなく、むしろ**②**の無機的な断片化を推し進めた果てに「人間性の脱却」を果たし、〈ポストヒューマン〉へと生成変化を遂げる【**③革命**】への逆説的契機に他ならない。花田のロジックを示せば左図のようになる。

あのY字路は**③**と**③**の間にある。「水棲人間」を目前にした勝見の引き裂かれた当惑もまた**③**と**③**の間にある。そして花田はそのY字路を前にして迷うことなく**③**の路を選び取つてみせるだろう。たとえばブライドドットイは前掲『ポストヒューマン』の中にこう記している——「もはやヒューマニズムの過去をノスタルジックに憧憬しているときではなく、むしろ、新しい主体性のありかたについて先を見越して実験していくべきである」と。と同



■ 花田清輝の《革命》のヴィジョン

時に彼女は、「ポストヒューマンに熱狂しているせいで、現代における人間・動物の相互作用のなかで働いている残酷な矛盾や権力の差異」に目を瞑ってしまうことに警鐘を鳴らすことも忘れてはいない。ブライドツティの警戒する「遺伝子工学的な先進資本主義による〈生〉の商品化」が招く「ディストピア的な反映」が、既に『第四間水期』の「海底植民地開発協会」の表象の裡に周到に練り込まれていたことも安部の先駆性を示して余りあるのだが、いずれにしても〈ポストヒューマン〉が孕むかかる危うさを見据えた上でなお、彼等がやはりその路を選び取るだろうことは疑い得ない。たとえば花田は「奴隷の言葉」(『改造文藝』昭和25・4)の中でもやはり明確に〈人間中心主義〉を標的に据え、『イソップ物語』等の「アイソップスの寓話」において「動物が、われわれ人間の代り」を務めるに過ぎない紋切型の表象に「不滴」を洩らした上で次のように続けている。

かれの動物のなかにみいだしたものは、ただ、動物の人間と似通っている一面だけにすぎず、両者を、その差別性と統一性において、きびしく把握することなど、てんでかれの念頭にはなかつたのだ。植物

や鉱物についてはいうまでもない。この人間中心主義、——このヒューマンニズムのなまぬるさが、なによりわたしの氣にくわない。(……)新しい文学が、こういう人間中心主義を克服し、非人間的現実と、組み、動物を動物として、植物を植物として、あるがままに、はつきりと、描きださなければならぬ。ことはいうまでもない。

花田の言う、「ヒューマンニズムのなまぬるさ」と訣別したその「新しい文学」こそ(ポストヒューマン)の文学に他ならない。近代から現在にいや増す宿痾としての「人間中心主義を克服し、非人間的現実と取組」むことで(人新世)の思想的課題に応答してみせる(ポストヒューマン)の文学がそれだ。

Y字路は到る所にある——現実の中に、文学の中に、過去と現在、そして未来に。我々はその路を選び取るこゝとが出来らるだろうか。それとも怖じ気づき、見慣れた路へ引き返してしまうだろうか。「予言機械」は問い掛ける——「注目していたんだよ。君が思いきって未来に踏みこむか、それともやはり尻込みしてしまふか……」と。埴谷雄高、花田清輝、安部公房が交響し合い、縦横に「実

験」を試みた(ポストヒューマン)の文学こそが、そのY字路に直面し、高揚と不安に引き裂かれた我々を鼓舞する里程標となるに違いない。たとえば『第四間氷期』の先駆とも言い得る安部の「洪水」(『人間』昭和25・12)が次のような一節によって閉じられていたことを想起しよう——「こうして第二の洪水で人類は絶滅した。だがしかし、すでに静まった水底の町や村の、街角や木陰をのぞきこんで見ると、何やらきらめく物質が結晶しはじめていたのだ。多分過飽和な液体人間たちの中の目に見えない心臓を中心にして」。

その「きらめく物質」の「結晶」を掴まんとして(ポストヒューマン)の文学が幕を開ける。

註

(一)阿部六郎の名は阿部が河上徹太郎と共訳したシェストフの『悲劇の哲学』(昭和9、芝書店)との関わりで埴谷が度々触れるものであり、安部公房とは「同じ発音の「アベ」なので」「ついうっかり間違え」そうになったエピソードを阿部さんの思い出——附、安部公房のこと」(阿部六郎全集)月報・第2号、昭和62、一穂社)に記している。

(2) 花田清輝「群論——組織の条件について」(『文化組織』昭和17・5)

(3) 埴谷雄高「突出したアヴァンギャルド作家——追悼 安部公房」(『週刊読書人』平成5・2・8)

(4) たとえば『世界SF全集27 安部公房』(昭和46、早川書房)収録の奥野健男による以下の「解説」を参照されたい——

「安部公房の『第四間水期』は、日本における最初の本格的長篇SFである。その事実だけでも『第四間水期』と、その作者安部公房は、日本のSF史上、輝かしく開拓者として不滅の名を刻まれるに価する」。因みに「『第四間水期』の四年後にUFOをモチーフとするSF長篇『美しい星』(昭和37・10、新潮社)を上梓した三島由紀夫が「『S・Fファン』のわがままな希望」(『宇宙塵』昭和38・9)の中に「私は心中、近代ヒューマニズムを完全に克服する最初の文学はSFではないか、とさへ思つてゐる」と記していることも、SFというジャンルと(ポストヒューマン)の切り結びとして重要であろう。安部には同時代評「現代の思想をさぐる——三島由紀夫『美しい星』」(朝日ジャーナル』昭和37・12・23)がある。

(5) 埴谷雄高「新しい質の面白さ 安部公房・著『第四間水期』」/ A・アシモフ・著、福島正実・訳「鋼鉄都市」(『東京新聞』昭和34・9・14)。因みに、埴谷がこの同時代評

の中で「安部公房の優れた点はロボットが原型としての人間と並置されるのではなく、ジュエイル博士とハイドの新しい論理的胚種として、私のなかに分裂した私として、対立して現われてくるところにある」と述べていたことは、後述するように「フランケンシュタイン」をプレテキストとして提示する花田との対照として興味深い。

(6) この座談会掲載の一ヶ月前に荒正人の『宇宙文明論』(昭和32・12、平凡社)が刊行されていることは重要だろう。「この本をまとめかけているうちに、突然、人工衛星が打ち上げられた」と「あとがき」にあるように、荒の宇宙への関心は人工衛星打ち上げに先立つものであり、姉妹編としての『宇宙教室』(昭和34、光書房)に引き継がれていく持続的なものであった。埴谷は書評「内面からの強い思考力 荒正人・著『宇宙文明論』」(『東京新聞』昭和32・12・23)を残しており、追悼文「荒正人を悼む」(『毎日新聞』昭和54・6・11)では「あされるほど並はずれた異常児性を、闇の宙空に浮かんだアラ・スパート、ニクのごとく、一筋に貫き通して去った」と記している。

(7) この座談会の中で「人間の段階で飛躍して、初めてえた外部を変化させる力……バヴロフ流に言えば、記号の記号による条件反射の獲得、つまり抽象能力ですね」として「猿から人間への飛躍」を特権視していく安部の立場に、アン

デイ・クラーク『生まれながらのサイボーグ 心・テクノロジー・知能の未来』（呉羽真他訳、平成27、春秋社）の議論を重ねてみることが可能だろう。クラークはこの書の中で、我々の「祖先が暮らしていた平原のどこかで初めて意味をもった言葉が発せられて以来」、「いつでも自分たちの心的活動」を非有機的な「紙やペン、電子機器の操作と融合」することで「外的な記号リソースへと嵌入^{ダブテール}接続」してきた（人間）は「生まれながらのサイボーグ」だったとする議論を展開している。ポイントとは、（人間）がテクノロジーと融合する未来において初めて「サイボーグ」として立ち現れるというような紋切型のイメージを斥けるクラークの立場にあり、そうしたイメージを助長させる類いの（ポストヒューマン）の議論をクラークは警戒している。

（8）この座談会についての分析は坂堅太「革命の未来に向けて——安部公房『第四間水期』論」（『昭和文学研究』令和3・3）に詳しい。とはいえ、以下の坂の分析には異論がある。坂は「生物工学の応用による「超人間」の可能性について論じられているが、安部は「自然よりも人間のほうを変えろ」という思想、人間の方を適応させて変化させるという考え方」は、「外部を変革させる可能性を閉」ざすものであり、結局は現在の支配秩序を温存させてしまつ、と否定する」と纏めるのだが、座談会の中で安部が「受動

的な変化の思想とは、要するにトランキライザーの思想だな」と述べる方向性は確かに「外部を変革させる可能性を閉して」しまっただろうが、「生物工学の応用による「超人間」の問題は「受動的な変化の思想」とは異なり、むしろ「人間」自体を一つの「外部」（客体）として「変革させる可能性」に属するものだろう。この点は「第四間水期」における（ポストヒューマン）としての「水棲人間」表象に関わる重要なポイントなので強調しておく。

（9）クリストファー・ボルトン「科学とフィクション^{サイエンス}、そしてポストモダン——安部公房『第四間水期』論」（『昭和文学研究』平成9・2）

（10）ロージ・ブライドッティ『ポストヒューマン 新しい人文学に向けて』（門林岳史監訳、大貫業穂他訳、令和1、フィルムアート社）

（11）安部が『第四間水期』およびその「あとがき」の中で提示した「未来」の位相は、E・レヴィナスの「時間と他者」（原田佳彦訳、昭和61、法政大学出版局）における次の記述を想起させる——「未来の先取り（予測）、未来の投射は、未来というかたちをとった現在にすぎず、真性の未来ではないのだ。未来とは、捉えられないもの、われわれに不意に襲いかかり、われわれを捕えるものなのである。未来とは、他者なのだ」。

(12)『第四間水期』に表象された「中絶」の問題をめぐるのは、「墮胎天国ニッポン」と言われた一九五〇～六〇年代の日本の生殖の事情」に着目した袖谷英紀「安部公房『第四間水期』論——SF・仮説・グロテスク」(『日本文藝研究』

平成26・10)が参考になる。また「人間は改造されるか」(丹羽小弥太訳、昭和32、講談社)等のジャン・ロスタンの著作が『第四間水期』の「水棲人間」表象に影響した可能性についての同論文の指摘は、(ポストヒューマン)に焦点化する本論にとっても示唆的であった。

(13)リー・エーデルマン「未来は子ども騙し——クイア理論、非同一化、そして死の欲動」(藤高和輝訳、「思想」平成32・5)

(14)この点については拙論「(子供)を生むこと——埴谷雄高『死霊』の中の〈反出生主義〉」(『愛知大学 文学論叢』令和3・3)および「(私小説)としての『死霊』——〈反出生主義〉をめぐる埴谷雄高の〈芸術〉と〈実生活〉」(『愛知大学 国文学』令和3・1)を参照されたい。

(15)花田が言及しているのは「人間そっくり」というテレビドラマであり、昭和三十四年七月二十五日に放映された。

(16)「フランケンシュタイン」については安部も「SFの流行にひいて」(『朝日ジャーナル』昭和37・9・23)の中で触れ、「この恐ろべき怪物も、じつは人間の愛と孤独をなぐ

るための、仮説にほかならなかった」と記していることが注目される。

(17)昭和三十四年八月十八日の日付をもつ安部による花田宛書簡。引用は『安部公房全集30』(平成21、新潮社)に拠った。因みに安部は『第四間水期』の「失敗した点」として「花田さんのおっしゃる「ウォーター・ペビー」を内面から書けなかった点」を挙げ、「あのやり方では、書けないのです。このすばらしい名称に思い到らなかったということだけでも、すでに一歩たちおくれました」と記している。

(18)関連する論文として他に、『第四間水期』から「人間と機械の関係はどうなるのか」という問いを導き、レイ・カーツワイルの『ポスト・ヒューマン誕生 コンピュータが人類の知性を超えるとき』(井上健監訳・小野木明恵他訳、平成19、NHK出版)を参照しつつ議論を展開する永野宏志「安部公房『第四間水期』覚書——マンマシン・システムに関する三つの「論理」的態度」(『工学院大学研究論叢』平成29・10)が注目される。

(19)クリストファー・ボルトン「歌い合う機械たち——安部公房とサイエンス・フィクション」(内藤由直・友田義行訳、『文学』平成19・7・8)

(20)『How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics』(University of

Chicago Press, 1999)。同書の第二章は「ヴァーチャルな身体と明滅するシニフィアン」〔表象〕平成20、第2号)として滝浪佑紀によって訳出されており、「訳者付記」における次の記述は、安部の「水棲人間」(ポストヒューマン)表象と親和的に捉えられるものだろう——「ヘイルズに」とって、「ポストヒューマン」とは、「人間」の進化の後にくるものではなく、「人間」を批判する契機である。情報パラダイムへの移行はそれまでの伝統的「人間」に揺さぶりをかけたのであり、そこから「ポストヒューマン」のユーロピア的ヴィジョンへと一足に飛びつくのではなく、その揺さぶりから見えてくる「人間」ないし「ポストヒューマン」がすでに巻き込まれている関係のネットワークを検証すること、そこにヘイルズのポストヒューマン論の真意がある」。

(21) 渡辺広士は『安部公房』(昭和51、審美社)の中で、花田の「ドン・ファン論」を引用した上で、「花田のリードする「夜の会」の運動に所属しながらおこなわれた安部公房の発想の百八十度の転換も、人間中心主義の精算と即物性の強調という点で、花田理論にまっすぐつながっている」と記している。

(22) 安部に及ぼした花田の影響については、埴谷が「存在感覚の変換——アヴァンギャルドの道」〔群像〕平成5・3)

の中で次のように記していることが注目される——「花田清輝の理論と安部公房の作品について比較研究し、その影響の深さを論じたものを私は見ないが、作者が成長しきたった長い年月の体験から作品の核心をひきだすこれまでの批評と研究が全崩壊する貴重な踏み出しがその比較研究からもたらされるに違いないと私は思っている」。本論もまた埴谷の要請する「これまでの批評と研究が全崩壊する貴重な踏み出し」に応答するものとして提出される。

(23) 同時代言説を前景化した安部・花田の交錯をめぐっては、拙論「(オブジェ)達の革命——花田清輝と安部公房」壁——S・カルマ氏の犯罪」(愛知県立大学 説林)平成28・3)および「(人形)のレジスタンス——花田清輝の(鮫物中心主義)的モティーフと《革命》のヴィジョン」(『日本近代文学』平成28・11)を参照されたい。

※安部公房『第四間水期』の引用は、単行本(昭和34・7、講談社)に拠った。引用に際し適宜旧字体は新字体に改めた。引用文に付した傍点と省略記号(……)は引用者に拠る。

(ふじいたかし・本学教授)